

泣いた! 笑った! in 途上国

～ルーマニアで得た宝物～

平成9年～12年に「青年海外協力隊」の看護隊員として、東欧のルーマニアに派遣された斗澤美智世さんに現地での体験について書いて頂きました。ルーマニアで多くの仲間をつくった斗澤さんの貴重なお話をお届けします。

私が未知の国、ルーマニアに派遣されたのは、あの劇的な、社会主義が次々と崩壊した東欧革命から、ちょうど10年がたとうとしている時でした。1989年の革命以後、ルーマニアの改革は遅々として進まず、政治・経済の状況は必ずしもよくなっているとは言えません。しかし、物資の出回りも年々豊富になり、庶民の生活も革命前とは比べものにならないほど、自由で、活気を帯びている姿に、東欧唯一のラテン民族らしさを感じました。

アプリコットの花が咲き乱れる5月、私は首都ブカレストにある国立救急病院に、手術室専門看護婦として配属になりました。



病院の仲間と斗澤さん(右)

ここは1,300名のスタッフが、24時間体制で働き、年間25万人の患者さんが訪れ、2万件の手術が行われている国内最大の救急病院です。

着任当初、ある程度進んでいる医師の技術に対して「看護」はゼロに等しく、非常にアンバランスな医療に驚き

ました。例えば、心移植を含む臓器移植を行う一方で、看護婦たちは手術室看護にとって最も基本的な「清潔・不潔」さえ理解していなかったりするのです。

問題は山積みでしたが、まず、自分自身がどうしたら本物の「仲間」になっていけるのか、悩んだ末、とにかくマンパワーになろう、と決意。毎日、毎日、皆が嫌がることや、汚い仕事を進んで行いました。そうして言葉に慣れる頃には、いつのまにかチームの一員となっていました。



友人の結婚式にて

活動を始めて一年が過ぎた頃、病院が大規模な改革を行いました。まだまだ社会主義時代の名残が消えないルーマニアでは、上からの指示がなければ本当の意味で物事が変わっていかないのが現実です。が、その改革の中で、日々訴えてきた事が大きく採用され、院内が驚くほど変わっていきました。また、看護教育の重要性を訴えていったところ、彼らの手で、定期的に看護婦の研修会を開催していくようになりました。

泣いたり、怒ったり、笑ったり、何かしら事件が起こる毎日でしたが、辛かったことも含めて、本当に素晴らしい2年間でした。ここで得た多くの友情が、私にとって何よりも最高の宝物です。

現在、札幌・溪仁会病院で、ニコレータ・ブルータルさんがカウンターパート研修を行っています。日本が大好きになってもらえれば、と心から願っています。

高校生エッセイコンテスト 一道内の高校生健闘一

さる5月10日まで全国で作品募集した「高校生エッセイコンテスト2000」には、道内からは昨年を大幅に上回る356点(昨年は158点)の応募があり、全国審査の結果、審査員特別賞1点、入賞4点、北海道センター所長賞2点、JICE賞2点、学校賞4校という大健闘となりました。当センターにおける表彰式は8月15日(火)に行われ、全国の審査員特別賞受賞者6名の北海道旅行は8月19日から3日間行われ、19日には当センターでも元気な高校生が、途上国の研修員たちと楽しい一時を過ごしました。

なお「中学生エッセイコンテスト2000」の作品募集は、来る9月20日(水)が締切です。高校生に負けない作品に、一人でも多くの中学生が挑戦して下さることを期待しています。

親と子の国際協力教室

来る9月10日(日)の午前からお昼にかけて、国際協力に関心がおありで札幌近郊にお住まいのご家族を対象に、当センターにおいて「親と子の国際協力教室」が開催されます。8月中にはすでに参加者の募集を終わり、小学校上級生をお持ちのご家族20ペアほどが、国際協カクイズ大会その他のプログラムに加わっていただき、昼食をとりながらの、途上国からの研修員や、青年海外協力隊経験者との交流が計画されています。

昨年のプログラムでは、開催日当日、北海道には珍しく台風の直撃が予想され、実施が危ぶまれましたが、何とか開催に漕ぎ着けることができ、申し込まれた全ご家族に参加いただくことができました。

このような機会をきっかけに、多くの市民の皆様が当センターを身近なものに感じて下さることと思います。

国際協力事業団(JICA) 北海道国際センター(札幌・帯広)

札幌/〒003-0026 札幌市白石区本通16丁目南4番25号 TEL: 011-866-8333

帯広/〒080-2470 帯広市西20条6丁目1-2

TEL: 0155-35-1210